

が続出し、それを埋葬した土饅頭がラーゲルの西側にあるとのことで、以前から不思議に思っていたことが解けた。なお、このドイツ人技師は二十年後には日本とドイツが手を結んでソ連をたたこうと云って、微笑しながら握手を求めてきたのには驚いた。

捕虜という特殊環境の中にあつてさまざまな条件を強要され、人間以下の最低生活の辛酸をなめさせられたことは、ある意味においては強靱な精神力の培養となり、その後の人生にプラスになったことは事実である。

ソ連抑留手記

京都府 武内敏次

応召・終戦

昭和十四年五月渡満、吉林省敦化県第八次青満子開拓団へ入植する。原野を開墾し十部落を建設する。在籍二百十五世帯、人口七百六十四人（昭和二十年現在）昭和二十年八月一日応召す。（満二十歳の徴兵検査では丙種

第二国民兵役）昭和十九年よりの応召者を含めて、団員の出征八十人となる。入隊は新京部隊で、編成後数日して作業に出る。小隊ごとに二、三人の転属兵が装備されているのみで、召集兵は丸腰でスコップ一丁持って、ソ連戦車の侵攻に備えて新京市街各地に対戦車壕とタコ壺を掘る作業が連日強行されて、八月十五日の終戦に至る。

八月二十日ころ、部隊の兵器はソ連軍に撤収さる。それより毎日小隊ごとに貨車に物資積み込みに出動する。ソ連兵監視のもとに、米麦雑穀などの食糧のほかにあらゆる物資を積み込んでソ連へ搬出する。九月上旬雑穀を積んだ列車に連結された有がい貨車に我々は一車両五十余人牛馬のごとく詰め込まれた。それが幾十両も続く。車両のつなぎ目ごとに小銃を構えたソ連兵が監視にっていた。列車は北へ新京を出発した。

このまま内地へ帰れるとすれば、開拓団に残した妻子はどうなるんだらう。ソ連で重労働されるなら果たして内地へ帰る日が来るのか。我々は捕虜なのか。ソ連は我々をどうするつもりか、生か死か。ウラジオストック

から日本へ帰すのだといううわさに一縷の望みを託す。
数日後、国境の町黒河に着きテントを張って野宿する。

その夜ソ連兵の自動小銃の爆発により戦友一人、腹部貫通の重傷を負い、数日後死亡する惨事を目撃した。月は
こごうと幕舎を照らし、夜露でしめり冷気はひしひし
と身に迫る。

ソ連領に入る

黒龍江を渡る船に物資積み替え作業に一週間ほどかかり、対岸ソ連領ブラゴエシチェンスクに渡る。シベリア
鉄道の貨車もすし詰めで足を延ばすこともできない。夜
間にブラゴエシチェンスクを出発した貨車は、翌朝夜が
明けてみると東ウラジオストックかとはかない兵隊たち
の夢をあざ笑うごとく西へ西へと去っていった。それから
十五日余り夜も昼も膝をかかえた箱詰めのお苦しい旅
が続いた。ようやく列車から解放されて到着したのは、
カザック共和国のバルハシというところだ。窮屈な車中
生活で心身ともに疲れ果て、土塀と鉄条網に囲まれた収
容所に入る。もとドイツ軍捕虜収容所だったというれん
がづくりの建物には今まで強制労働に毎日を送っていた

者の怒りや悲しみがシミ付いている感じがする。我々も
いつ懐かしい祖国の土を踏むことができるかわからぬ希
望のない中で、数日後よりソ連に奉仕する労働が始まっ
た。

収容所生活

ここバルハシは見渡す限り荒涼とした砂漠の中につく
られた街で、銅の原石が産出することから、これを溶鉱
炉で溶かして銅板を制作する一連工場とそれに付随する
各種の施設がある。その施設へ我々作業隊が出動するの
である。れんが工場、自動車修理工場、鋳物工場、家具
製造工場、鉄道貨物積み込み荷おろし等々。れんが工場
ではれんがの運搬、積み込み、材料の砂運びも激しい労
働である。バラスの貨車おろしも厳しいものであった。

その日その日の作業能率が基準のどれに当たるかという
ことで、現場監督が作業隊長にやかましくわめいている
ことを見る。作業は何週間目かわかるが、食糧の乏し
いことが骨身にこたえる。

朝食は飯ごうに四分の一の雑炊、これは塩汁に雑穀の
粉を少々入れたもの、昼食は黒パン少々を袋に入れて作

業に出る。夕食は飯ごうのふたにすぐ切りのアワがゆに塩汁という献立で、徹底労働の食事ということはできない。いつも空腹をかかえている。

冬はすぐやって来た。いてついた大気は夜明けころは零下四十度、五十度と下がる。午前七時半の収容所出発にはまだ暗いときがある。零下三十度以下のときは作業待機で三十度になって出かけるのだが、綿入れの作業服、防寒帽をとおして寒さが肌をさす。

夏場

十二月鑄物工場へ小隊三十余人と作業に行く。大きなエンジンのようなものが鑄物の型枠からはずされ、小グレンで運ばれてくる。その不用物をハンマーでたたいて落とす作業が大変だった。重くて二人がかりでやっと運ぶ。ある日その運搬中に右手人差指をつめてしまった。痛む指を辛抱しながらその日は終わったが、翌日は赤くはれて痛むので医務室に行く。四、五日通ったところで痛みも少なくなるところへ、ソ連軍医が収容所外の一一般の病院へ連れて行った。ここで治療するというのだ。日本人は一人もいない。周りはソ連人ばかり、えら

いことになったと思っているうちに、数日病院暮らしをして五日目ぐらいか治療室で看護婦が何か言っているが、言葉がわからない。医師の言葉もわからない。何かしらドキッとする雰囲気だ。後ろ向きで右手を押しさえられ局部麻酔を打たれたらしい。やがて幹部の指先から何回かで切り取られてゆくのがわかる。痛くはないが指がなくなる。それも突然の出来事。それも切断せねばならぬほど悪化しないように思われたのに、言葉の通じないところでいま一本なくなる。涙がポロポロ落ちた。即日退院して収容所に帰ったが、切断された指は数日寝ることもできぬほど痛み続けた。作業に出るにはそれから二か月ほどかかった。

夏・冬

バルハシ湖という大きな湖がある。昭和二十一年の夏何回かここへ来た。隊岸から運んで来た岩塩を運搬船から荷上げする作業だった。船倉へ鉄の箱がグレンで下りてくる一トン積みその箱の岩のような固い塩を転がしたり抱えたりして入れる。炎天の船倉は焼けて火を吹くような暑さだ。積み終わると上へつり上げてすぐ下りて

くる。バケツに入れて水をガブガブ飲みながら、汗と塩にまみれて積み込むが、監視兵はダワイ、ダワイと怒鳴る。

二回目の冬がやってきた。満州で冬にはなれているが、抑留生活の冬は格別だ。大地が数メートルも石のように凍結しているというに水道管を敷設する溝を掘れという。先が丸くなったツルハシはね返るばかり、作業は遅々として進まないと警備兵は防寒外套を脱げと命令する。寒ければ穴を掘れという、一日かかっても二十センチの穴が一メートルも進まない。昼休みに腰を下げた黒パンを立ったままかじる。時間をかけて少しずつ食べる。吹きさらしの路上に砂を巻き上げた風が吹きつける。

復員

我々作業隊の報酬は事業所から収容所へ支払われるのだそうだ。それを食事代などの経費に当てられ、余れば給料として兵隊にしてくれることになっているようだが、もらったことがない。

二回目の冬も過ぎ、昭和二十二年の六月食当たりか、

下痢が続いたため、収容所内の病室へ入院した。一週間ほどで退院したとき、身回り品を持ってすぐ貨車へ乗り込めというソ連軍の命令だ。病弱者百余人がバルハンを出発、途中幾つもの駅で増結して、ついについにナホトカへ。

虜囚の記

岐阜県 斎藤 克己

運命の岐路

私の運命は、朝鮮の三十八度線以北にて終戦を迎えたときから、現在に至るまで半生を変えたといっても過言ではない。その当時、私の所属部隊は、平壤の大同江近くの高射砲大隊で、その部隊に入隊したのが終戦の年の五月、満二十一歳であった。

一戦も銃火を交えずに終戦、その直後朝鮮人で組織した治安隊に武装解除を受け、兵舎内の物品は民間人に大半略奪され、旧日本軍隊の面目は跡形もなく踏みにじら